

画像を Classroom でコピー設定にて提供してノートを取らせて 出させる取り組み

小川健*1

Email: takeshi.ogawa.123@gmail.com

*1: 専修大学経済学部国際経済学科

◎Key Words 画像, Classroom, コピー設定, ノートテイク, 穴抜き

1. はじめに

ノートテイクは古来より講義の理解を助ける手段として重要視されてきたが、デジタル機器の普及により紙のノートを取らない事例も登場してきた。

また、コロナ禍で特に普及した LMS (Learning Management System) によるオンラインでの課題提出先は、講義時間はおろか(深夜など)開校時間以外にも比較的安全に(ここでの「安全」とは提出者と講義担当者以外の外部のものによって盗まれる心配の少ない、という意味で記載している)課題提出を可能にした反面、「ノートやワークブック丸々1冊提出」のような、「継続して同じものを使い続ける形での」提出方法は(実施可能でも)現実的ではなくなった面がある。

一方で、古来より穴抜きプリント等は板書型・スライド型ほかの講義を問わず数多く活用されてきたが、上記のように LMS を利用した提出法の場合には PDF 入力フォーム等のように「穴抜きのファイル」でも活用しないと、スキャナも無い状況では(写真提出では分量が多くなり過ぎて)提出が困難な面が生じる。

他方で、コロナ禍においては特に、出欠確認に(対面回収ではなく LMS 等を通じたオンラインの)課題提出をもって換える形が取られてきたが、上記の点から手書きで勉強したい人にとっての手段が限られる問題は残った。ビデオ会議を利用した参加者に関して「単なる把握」であれば履歴を確認すれば済むが、接続しただけでその場に行かない事例や、いたとしても(スライドでの講義が中心となる)ビデオ会議による遠隔講義はテレビの「ながら視聴」の如く付いているだけなどを防ぐ手立てはこれだけでは取れない。そうすると、理解を促す観点では実際に講義時間中に提示する課題を取り組ませる必要性も生じるが、過剰な課題は受講生にも教員にも大きな負担となる。

そこで本報告では古来よりある穴抜きプリントの要領での「穴抜きスライド」をスライドの中で1枚だけ用意し、その1枚だけ埋めて LMS である Google Classroom に出させる形を取った事例を報告する。

2. 対面・遠隔両対応での講義にて

本報告の事例ではコロナ禍で一部広まった対面・ビデオ会議(実際には Google Meet)での遠隔中継、そして(事前収録配信や当日の講義中継の録画による)映像配信の三面对応をしている専修大学・経済学部・現代経済学科(2年以上)および生活環境経済学科(3年以上)での「国際経済論1」の2025(令和7)年度前期の講義事例を取り上げる。この講義はコロナ前では対面講義であっ

たが、コロナ禍で収録配信型の講義を余儀なくされた後、2022(令和4)年度に対面再開の際に対面・事前収録配信とした後、2023(令和5)年度に対面教室にて Meet を繋ぐ「対面・遠隔中継・収録配信」の三面对応へと切り替えた講義である。しかし、2022(令和4)年度の対面復帰の際に専修大学は出席システムが無いことから、講義側で参加を求める「仕組み」を導入しないとテストしか来ない(ため、テストの問題傾向・解説映像に入れた項目以外はそもそも講義実施しても事実上ボイコットされてしまうため、出題しにくい項目はそもそも勉強してもらえない)面があることを痛感した(一方で、単に出席を取ったとしても来て寝ている・スマホで遊んでいるでは意味はない)。中にはその講義時間に(アルバイト関連の影響など)そもそも来られない状況のまま受講登録をして、テストだけ受けに来ている事案も見受けられた。

そのため、2023(令和5)年度から講義の録画から外して課題文入力などを課し、対面もしくは遠隔参加の受講生は答えられるが、収録配信だけ確認しても載っていないので答えられない形を取ることにした。この入力は(respon という、本学で利用している LMS とは別会社で大学にて契約している)短文入力が可能なクリッカーを利用して当初行っていたが、LMS などとの連携が無いことから締め切り等の To Do スケジュール管理、督促などの LMS 機能利用が難しく、スマホを切り替えたら「まだ登録していないから対処できない」等の声に都度対処する必要性もあったため、切り替える機会を伺っていた。

3. 穴抜きを「コピー」設定で画像提出を求める

今回の取り組み自体は、古くからある穴抜きスライドを1ページだけ実施し、そのページを Classroom の「コピー」設定にして、Classroom の課題投稿の形で提出を求めるものである。穴抜きスライド自体は何ら目新しいものではない。しかし、この形での「画像提出」を求める形にして、少し講義における変化が見られた。

これまで対面・遠隔中継の両対応であるハイブリッド型の講義での知見として、受講生が自由に選べる場合、現実には対面参加はごく一部であり、かなり多くの人数が遠隔中継を選ぶ、という部分があった。当該科目は水1限であることもあり、1限のためとりわけ遠隔中継の比率の高い部分があった。とりわけテスト範囲が終わった後の回では、講義時間にもかかわらず殆ど対面参加のいなかった状況が見受けられていた。対面参加者には講義資料を担当教員が紙媒体「でも」配付していたのにも関わらず、である。

次の図1は実際に提示した穴抜きスライドの例だが、穴抜きの項目が増えるほど「書く時間」が必要になるため、書き終わるのを待つだけの進捗の問題がある事から、各講義回で1ページだけにしている。また、画像での送信は1枚ずつとなる関係で、複数ページにすると提出課題数が増える事へのクレームも考えられる面がある。

参加促進問題(画像提出)

- 日本は外資呼込より外国への投資が多い。
- 既にコロナ前を_____外国籍の日本在住者。日本は**移民受け入れ**の意識・体制に遅れ。
- 賃金節約で外国人労働者を受け入れてきた旧_____は日本の**優れた**技術を学んでもらう想定や前提の高賃金が既に_____。減り行く人口で_____の対策も重要。
- マクドゥーガル＝ケンプ・モデルでは動く要素の報酬が_____するまで動く。動いた要素・送出国の動く要素の取り分は増え、受入国の動かない要素も取り分は増える。受入国で動く要素の取り分は_____⇒_____の説明。

図1 実際に提示した穴抜きスライドの例

実際に埋めた後として提示をしているものが図2である。ここで注意点として、完全には提示せず1項目だけ「その周辺からは類推困難な」項目の穴を残しておいて提示をし、その1か所は別途説明する形を取っている。ちなみに図2の空欄では「技能実習制度」が入る。

参加促進問題(画像提出)

- 日本は外資呼込より外国への投資が多い。
- 既にコロナ前を上回る外国籍の日本在住者。日本は**移民受け入れ**の意識・体制に遅れ。
- 賃金節約で外国人労働者を受け入れてきた旧_____は日本の**優れた**技術を学んでもらう想定や前提の高賃金が既に崩壊。減り行く人口で**労働者不足**の対策も重要。
- マクドゥーガル＝ケンプ・モデルでは動く要素の報酬が**一致**するまで動く。動いた要素・送出国の動く要素の取り分は増え、受入国の動かない要素も取り分は増える。受入国で動く要素の取り分は**減る**⇒**Brexit**の説明。

図2 実際に提示した穴埋めスライドの例

全てを埋めないのには理由がある。全て埋めると提示した瞬間、スクリーンショットやスマホ写真でも撮って直ちに講義を退出する事例が出て来るからである。写真さえ確保できればもうその講義に用はないからである。

また、全部埋まった写真を提示してしまった場合、画像提出をその写真のまま出す危険性がある。写真だけ撮って出しても、その写真に何が写っていたか等の部分は頭には残らない。

4. 画像提出だと慣れ具合には差が出る

実際に実施してみると、「コピー」設定なので各人の所にはそのワークシートも同然なものが全員に「提出用に」

提示されている。しかし、画像だから、その上にペンで描いたかの如く「ファイル書き込む」の形を取っている場合に加えて、対面参加者のみに配付している紙媒体の資料に手書きで書き込んでスマホ写真を撮り、その提示したワークシートとは別に添付して出している事例がある。そして、そのために「敢えて」対面参加をしている事例が見られるのである。

これは、対面・遠隔両対応であったとしても、画像に直接書き込む形を苦手としている受講生の中には対面参加を「敢えて」促す形になっている。また、入力している事例でも文字を打ち込んでいる事例とファイルに手書きで書いている事例が見られる。

これは重要な点であり、Classroomの「コピー」を利用したワークシートの形は「文書形式」等の形だと本来は手書きの方が良いのに、という人も打ち込むことを事実上余儀なくされる。しかし、この画像提出の形であれば手書きの方が学びやすい人はそのようにし、打ち込む方が有り難い人は打ち込む選択をすることになる。また、「文章を打ち込む形なら」本来は対面参加が向く人でも遠隔中継での参加を選択しがちになるが、この方法なら個人に合う形を選択し易くなる。

5. おわりに

本稿では画像をClassroomでコピー設定にして提供して、ノートテイクの1種として1ページだけ穴抜きスライドの形を取り、画像提出の形をとった事例を取り上げた。「コピー」に設定するのを画像にすることで、より適した学び方を「選びやすい」メリットがある。

謝辞

この方法で出題した際に取り組んでくれた専修大学・経済学部・現代経済学科2年次以上および生活環境経済学科向け3年次以上科目「国際経済論1」の2025(令和7)年度前期の受講生に感謝する。本稿の有り得るべき誤りは筆者にのみ帰する。